

浄土宗のみおしえ

⑤

宗
紋



つきかげ
よう
月影杏葉紋

あなたのお寺の宗旨とおしえを
ご存じですか。

浄土宗の經典(疏)を一つでも
知っていますか。

浄土宗です。浄土宗の教義は、阿弥陀仏の本願を信じ南無阿弥陀仏と称えれば必ず極楽浄土に往生することができるといふ教えです。素直な心「至誠心」、深く信じる心「深心」、阿弥陀仏の極楽浄土に往生したいと願う心「回向発願心」を三心といいただ往生極楽のために南無阿弥陀仏と称えるなかに自然とこもってくと説かれ念仏ひとすじの生活を教えています。

浄土宗では、『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』のいわゆる浄土三部経を所依經典とし、その正しい意味の解明に天親菩薩の『往生論』、善導大師の『観無量寿経疏』及び法然上人の『選択本願念仏集』があげられます。

念仏とは何でしょうか。

数珠は何のためのものですか。

法然上人です。

浄土宗の宗祖は誰ですか。

浄土宗の本尊様は何か知っていますか。

阿弥陀仏です。浄土宗寺院の本堂には中央に阿弥陀仏を安置します。あるいは弥陀三尊といつて、阿弥陀仏と脇侍の観音菩薩を向かって右側にし、勢至菩薩を左側に安置するのが普通です。本堂の両脇段には向かって右側に高祖善導大師、左側に法然上人のお像が祀られます。

口に南無阿弥陀仏と称えることで、阿弥陀仏に帰依し、全てをおまかせし、感謝するといふ意味があります。これを十返となえて仏との縁を結ぶことを十念といひます。十という数はインドで十進法が発明され、数のまとまった単位とされたところから来ているようです。法然上人の念仏義は専修念仏で声高らかに南無阿弥陀仏を数多く称えるほど功德があるととして「数を定めなければ怠けてしまうようになりますから、数を定める事がよいことなのです。」……「念仏の数は一万遍をはじめとして、二万、三万、五万、六万、あるいは十万遍まで称えるものです。このなかで、お心にまかせてお思い

になる程度を称えられるのがよいのです。」と申されております。

恵まれつつ悩む現代人。豊かさへの追求だけでは真の心の安らぎは生まれません。心に阿弥陀様を刻み込み、やさしい心、そしてどんな困難にも堪え忍んでいける強い心に育つように毎日真心こめて念仏を称えましょう。

一口でいうなら、計算器です。

仏様の持ち物の一つに数珠があります。宗派によって数珠の作法が異なり、手にかけたり、首にかけたり、擦って音をたてたりします。一連の数珠は普通百八の珠がついていて、お経を唱えながら数珠をジャラジャラともむと私達の百八の煩惱が消えてなくなるといふ宗派もあります。

語源をたどると、サンスクリット語でジャバマラーといひ「低い声でブツブツ唱えるときに使う輪」という意味です。ブツブツ唱えるのは古くは呪文のような真言で、唱えた真言の数を数珠を繰りながら数えます。

浄土宗では主に二連の数珠を使います。大きさの違う珠の二つの

輪と、二本の珠の連なりがついており、珠の形の違いを利用してソロバン的に念仏の数を数えています。別時念仏といって日に何千回、何万回と南無阿弥陀仏をお称える時に、数えるのに便利なのです。

葬儀の時、白い布、白木、白紙など何故白が多いのでしょうか。

葬儀は悲しいことで、前もって準備をして待つことではない為、「思わぬ不幸」で慌てた心境、情況になるので葬具は染めたり、塗ったりしている暇もないということを表して、白が多くなるのです。

「引導を渡す」とはどういうことでしょうか。

もとは人々を仏道に引き導くことを意味します。「引導を渡す」といえば最後通告する、最終的な宣言をするといった意味にとられています。葬儀の場合、導師が誦文を唱えて亡者に仏縁を結ばせることから「引導を渡す」といったものです。引導は亡者に向かつて唱える法語のことをいい、この法語によって迷える亡者を導き、成仏させるといことから法語を

唱える人を導師と呼んだのです。しかし単なる法語の意味ではなく、本来は衆生たちの迷いを救い、仏道に導く事をいったもののなのです。

亡くなると何故四十九日の供養をするのでしょうか。

中陰が明ける、忌明けということです。

古来インドでは、人間は輪廻転生すると考えられていました。この世に存在している間を本有といひ、さらには死の瞬間を死有といひます。生を終えてから次の生を受けるまでの期間が四十九日間ありとされ、この間を中有、あるいは中陰と呼びます。中陰供養はこの間の宙に迷っている霊を供養します。初七日から二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日、と法要が続く、七七日忌の四十九日に中陰が明け（満中陰）仏となつて忌明けとなります。このため四十九日の法要を行うわけです。

また、四十九日の満中陰で忌明けとなると、忌みごもりしていた遺族が日常生活に復帰するという意味もあります。土地の習慣によって多少の相違はありますが四十九日の法要を営んだ後「精進おとし」が営まれます。今日では葬儀

当日にも営まれています。中陰壇は取り片づけ、白木の位牌は菩提寺に返します。忌明けに中陰壇を片づけることを「壇ばらい」、「壇引き」とも言い習わしています。仏壇のある人は、漆塗りの位牌をつくって中に安置します。中陰壇に飾った遺影は片づけるか仏壇の外に飾るようにします。この日は「川行き」、「灘行き」といって家の内外を清めることも行われます。

満中陰の忌明けにあたって、忌明けの挨拶を兼ね葬儀の会葬者にお礼をする習慣があります。これが香典返しです。形見分けもこの日の法要の後なされることが多いといえます。

しかし、この四十九日の法要は通仏教的な考えが元になっており、浄土宗では念仏を申すものはこの世の生を終わると、阿弥陀様の本願のお力で極楽往生させていただくことができるのです。しかし、一般の仏教の習慣上浄土宗でも忌日法要として初七日をはじめ、七七日の満中陰の法要も勤めます。

仏壇は、家のどこに置くものでしょうか。

北に置いて南向き、あるいは西に置いて東向きといわれますが、

これは、北は最も尊い方位、西は極楽浄土を表しているからです。置く場所は、家の中で一番清々しい所、生活に密着している所、いつでも見ることのできる所など、掌を合わせやすい場所が良いとされています。

霊前には普通いくつの器を供えますか。

飯碗・汁碗・壺・平・高坏の五つです。あげるものは精進料理（肉・魚・五辛・酒はさける）で飯碗・飯・汁碗・汁・壺・なますあえもの・煮豆、平・煮物、高坏・漬物を蓋を取って供えます。

年回法要はいつまで続けますか。

年回法要は永遠に続けるのが理想であり、そういう願いを持つのは大切なことです。しかし、亡くなって百年も過ぎますと、その故人の生前を知る人は皆無で故人という認識よりもその家の先祖という抽象的な存在になります。

では現実には何回忌まで続けるといふことですが、一周忌は当然、三回忌、そして七回忌、一や三という規模でないとしても、次に十

混ざって使われているのです。

お寺さんに差し出すノシ袋の表には何と書きますか。

が労賃になってしまいます。

お盆は何のためにありますか。

法然上人と門弟の百四十五箇条問答から

お布施です。

大乗仏教で確立された考え方に六波羅蜜というものがあり、悟りに至るための六つの修行方法です。数え上げると布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六つです。第一番目に布施が来て重要な修行(菩薩道)といえます。布施とは人に施しをすることです。お金、品物、あるいは精神的なものでもかまいません。釈尊の時代や、それ以前のインドにも、他人に金品を与えることは徳の高いことだとする考え方がありましたが、大乗仏教ではその考え方をもっと深め菩薩道の一つとしました。

法要後に行うご供養をどうしてお齋(とき)というのでしょうか。

齋という字には、つつしむという意から、罪を悔い改め、身・口・意の三つの行為をつつしみ、身を清めるという意があります。これと、仏事の時の食事という意が

先祖の霊の大歓迎会です。

お盆はただしくは盂蘭盆会と書き、梵語ではウランバナといいます。その起源の一つは、古来インドの農耕社会の祖先崇拝に発したもので子孫が絶えて供養されない霊は逆さ吊りの苦しみを受けるとされていて、そこで霊前に飲食を供えて供養したもので、その後仏教の行事に組み込まれました。

もう一つの説は、釈尊の弟子の目連が餓鬼道に堕ちた母親を救済するために釈尊に教えを頼みました。釈尊は七月十五日の自恣(夏の終わりに僧が一堂に集まり懺悔しあう行事)の時に飲食を供え、お盆にこの世の甘いものをのせて供養せよと教えました。お陰で母親は餓鬼道の苦しみから救われたといえます。

出家僧や寺院に対して功德のために在家者が施しをするのを財施といえます。また、僧は反対に在家者に読経、説法を施し法施といえます。そして不安や畏れをとり除いて心の平安を施します。これに施無畏といえます。僧による読経、説法に対して在家者は財施、即ち布施をもって応えます。お経料などと書く僧による法施が単なる労働となってしまう、お布施

○仏をうらむことがありますか。

これに対し法然上人は「どうあっても仏をうらんではいけません。信心ある者は大罪ですら消えます。信のない者は、小罪を犯してさえも消えません。わが信のないことを恥なさい。」と教えています。

○どうしても心に妄想が起きるときはどうしたらいいと思いますか。これに対し法然上人は「煩惱によって心が動揺するのは悪いことです。必ず一心に念仏を称えなさい。」と教えています。

○現在の世を助かるように祈るのに、ご利益のしるしがない人はどうしたらよいのでしょうか。

これに対し法然上人は「現世を祈るのにそのしるしがないということは、仏が嘘、偽りをいっているのではありません。自分の本心が説かれたとおりにしないことによつてしるしのないことがあります。観音を念ずるにも一心にすればしるしはあります。もし一心にしなければしるしはありません。宿縁が厚い人は、前の世から定

まっている報いですらもお変わるものです。昔も今も縁の浅い人は塵ほどのわずかな苦しみになえもしるしがないといっています。仏をうらみに思いついてはいけません。ただこの世・後の世のために仏に仕えるには真心を込めて真実を励むことです。するとこの世の思い事もかない、後の世も浄土に生まれることになりす。しるしがあれば自分の心を恥なさい。」と説いています。

○酒をのむのは罪になるでしょうか。

これに対し法然上人は「本当は飲むべきではありません。でも、それは世の習いです。」と教えています。

○女の人の物事に対するねたみは罪深いでしょうか。

これに対し法然上人は「ただただ、一心に念仏を称えなさい。」と教えています。

三宝とは何でしょうか。

仏宝・法宝・僧宝のことです。

仏宝とは、三世の諸仏から、下は木仏・金仏・画像に至る一切の仏さまのことです。

法宝とは、仏の説かれたお経、教法のことです。

僧宝とは、観音様や、地藏様から降つては弘法・法然・日蓮等の上人やお坊さん等仏の教を信仰し、教を守つていこうとしている人々ということです。これらの一つが欠けても仏教は成り立ちません。

坊主とはどんな言葉でしょうか。

坊とは大きな本寺に付属する僧たちがその寺域に建てて住居とした寺のことで平安時代の後期から多く設けられ、これを塔頭「塔中」ともいいますが、ここにいる塔とは、住職の墓に立てた供養塔であり、頭とはほとりのことで住職の死後その遺徳をしたう弟子たちから墓のほとりに庵を造つて住んだことから出た言葉であります。

坊の語は様々な使われ方をします。住職が坊主で単に坊ともいわれ敬称がついて御坊となり、中世以降は僧侶の総称として坊さんと呼ばれます。法然坊などというのもその例です。また、僧以外でも軽く親しんでいるのがお花坊の類でその他朝寝坊、食いしん坊などがあります。坊主の語も中世以降

は住職だけでなく僧侶の総称となり、さらに用途がひろがって様々に使われます。短い頭髪を象徴して坊主刈り、坊主頭と呼ばれ、男の子は坊主刈りをしていたので坊主といい、略して坊やと呼ばれ、照る照る坊主からさらにすりへったタイやまで坊主といい、魚釣りで一匹も取れないのを今日は坊主だったと言ひ合う、そして代表的なものは何をやっても三日と続かない者を三日坊主ということですから坊主という言葉は意味が深いようです。

入道という言葉の意味は何でしょうか。

仏道に入ることを意味し、すなわち出家修行、あるいは出家者のことをいいます。

平安時代とくに藤原期から是在俗のまま剃髪した人を入道といつて、又は入道入りともいいました。鎌倉時代から戦国時代にかけて在家で剃髪仏道に帰依した者は数知れず、いずれも入道といいました。例えば上杉謙信、武田信玄など頭の禿げた者を大入道といい、また積乱雲を入道雲というのもその形をたとえたものです。たこ入道は出家をあざける差別ではないです。

ようか。

入道は出家または舎家などの語とともにインドですでに用いられていましたが文字通り仏道に入る意味なのです。

檀那という言葉の意味は何でしょうか。

一般に大商人や、お金持ちのことをいいますが意味は施し(布施)ということ、多くの人を養つたり、人のお役にたてる立派な人のことですが、これがいつの間にか富と混同され伝わってしまったのです。お檀家(物を施す)に対し、その菩提寺を檀那寺(法、教を施す寺)ともいいます。

つもり違い十訓

高いつもりで低いのが 教養
低いつもりで高いのが 気位
深いつもりで浅いのが 知識
浅いつもりで深いのが 欲の皮
厚いつもりで薄いのが 人情
薄いつもりで厚いのが 面の皮
強いつもりで弱いのが 根性
弱いつもりで強いのが 我
多いつもりで少ないのが 分別
少ないつもりで多いのが 無駄